日本文学全史 近代

責任編集
市古 貞次

編集
秋山 虔
大久保 正
久保田 淳
堤 精二
三好 行雄（本巻担当）

學燈社

はしがき

一千数百年に及ぶ日本文学の流動・展開のあとを、明快・的確に捉えるには、どうしたらよいか。日本文学の歴史を跡づける方法については、すでに何回となく論議され、また種々の具体的な方途も提唱されている。これには研究者の文学研究の態度・方法が深くかかわっており、文学史の構築は研究の最後の到達点ともいうことができようが、日本文学史の記述にあたって、まず問題にされたのは、組織・編成であり、その史的区分であった。

和歌の流れ、文章の変遷などを説いた書はすでに中世・近世に書かれていたが、日本文学の歴史が著されるに至ったのは、近代に入ってからである。明治二十三年十月刊行の三上参次・高津鍬三郎の『日本文学史』は「本書は実に本邦の文学史の嚆矢なり」と自ら記すように、西欧の文学史に啓発されて初めて書かれた日本文学史であり、以後の文学史研究の出発点となった書であるが、はじめに文学の起源を述べ、以下奈良朝・平安朝・鎌倉時代・南北朝及び室町時代・江戸時代という時代区分のもとに叙述している。主として本書によったアストンの『日本文学史』（一八九九）もこれに倣っているが、江戸時代の次に東京時代を設け現代を扱っているのが新しい。後年坂井衡平が大著『新撰国文学通史』（大正一五）で、大和時代・飛鳥奈良時代・平安時代・鎌倉時代・吉野京都時代・江戸時代・東京時代としているのは、アストンのそれと関係があるらしい。

また三上・高津の『日本文学史』に先立って二十三年四月に出た芳賀矢一・立花銑三郎の『国文学読本』は『国文世々の跡』などの影響をも受けた文例集・歴代選であるが、巻頭に長文の緒論があり、文学の定義・特性

等を述べ、国文学の沿革を記しているのが新鮮であった。これは簡単な文学史ともみられるが、そこでは上古・中古（六四五―一二八五）・鎌倉時代・室町時代・江戸時代・維新後と六分し、上古・中古という称を用いたのが注目される。芳賀矢一は九年後の明治三十二年『国文学史十講』を著し、これがのちに出た藤岡作太郎の『国文学史講話』とともに明治期を代表する文学史として長く重んじられたが、上古・中古・近古・近世・現代の五に分かち（近古を中世ということが今日では多いのを除いては）、ほぼ今日まで通用している時代区分を確立したということができる。

こうして日本文学史では、平安・鎌倉……等の政治の中心地によるものと、上代（上古）・中古・中世……等の時間によるもの（これは古え・中ごろ・今という古来の考えに基くと同時に、西欧の文学史の影響もあろう）とが併用されて今日に至っている。そういうなかにあって、大正年代に尾上八郎が『日本文学新史』（大正三）で時代思潮の変遷を重視し、情中心時代（上古・奈良朝・平安朝）・法中心時代（鎌倉・室町）・道中心時代（江戸）・主義中心時代（明治）というように分け、津田左右吉が『文学に現はれたる我が国民思想の研究』（大正五―一〇）で、貴族文学の時代、武士文学の時代、平民文学の時代と名づけ、土居光知の「日本文学の展開」（『文学序説』大正一一）が叙事文学の時代、抒情文学の時代、物語文学の時代、主情主義否定の時代というように文学形態によるなど、新しい区分が行われている。これらの大正期の試みは、政治史的な区分にあきたらず、かつ古代・中世などの時間的区分が必ずしも固定しがたい点などを考えて、思潮・性格・形態などによって文学の流れを展望しようとしたのであろうが、それぞれの名称その他については異論が少なくなく、多くの人々の採るところとならなかった。

いったい歴史を記述する方法として、編年体・紀伝体・紀事本末体の三が存することは、中国の史書について

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

つとに言われているところである。文学史が文学の展開を捉えるものであることはもちろんであるが、同時に作品を創作した人間と、作品乃至人間（作者・読者）に密着する時間的、空間的環境を無視することはできない。それゆえこれまでに書かれた文学史は大きく史的区分を行い、編年体の時の推移を第一としながらこれに文学形態の展開を考慮に加え、作家の伝記等をも織りまぜている。つまり編年体を重んじながらこれに紀伝・紀事本末体を適宜織りまぜて成っているといってもよいかもしれない。

以上のように文学史の編成については、種々試みられており、なお模索の域を出ない面もあるが、本書では、一般に用いられている時間による史的区分をとり、上代・中古・中世・近世・近代・現代の六区分とした。上代は大和時代、中古は平安時代、中世は鎌倉・南北朝・室町時代、近世は江戸時代に相当し、近代は明治・大正期、現代は昭和期をほぼさしている。そして各時代のなかにそれぞれ十章乃至十三章を設けて、各形態の展開を十分考えながら、文学の総合的な流れを描き出すように努めたつもりである。なお各時代の初め終わりについても研究者によって必ずしも一致していないが、本書では最も一般的であり妥当だと思われる説に従うようにした（各巻序章参照）。

以上のような構想のもとに、在来の研究成果を踏まえ、最も新しくかつ正確な文学史を提供することをめざして、学界の第一線に立つ方々を煩してそれぞれの専門領域について御執筆願ったものがこの『日本文学全史』である。本書は創業三〇周年の記念出版として、學燈社から依嘱を受け、大久保正・秋山虔・久保田淳・堤精二・三好行雄および市古貞次の六名が討議を重ね企画編成したものであるが、一般にこのような多数の分担執筆はやもすると全体としての統一を欠く虞れがある。そういう難を十分考慮し、各巻については、編者がそれぞれ専門とする時代を担当して、執筆者の御協力のもとに、統一をはかり有機的な連絡・調整を行うよう極力努めたつ

もりである。編集の不手際などからなお不十分なところも少なくないであろうが、将来の文学史研究への一つの礎石となればまことに幸いである。終わりにわれわれの企画に賛同して御協力下さった執筆者各位に心から御礼申し上げる次第である。また出版に当たって労を惜しまず尽力された學燈社に対しても謝意を表したいと思う。

昭和五十二年三月十五日

編者代表　市古貞次

目　次

序　章

近世の文学 17 ／出版文化 18 ／仏教から儒教へ 20 ／雅と俗 21
文運東漸 23

第一章　近世文学の胎生

1　近世初期の学問と和歌……26
漢学 26 ／和学 29 ／歌学と和歌 30

2　仮名草子……34
定義とその範囲 34 ／写本より刊本へ 36 ／恋愛物 39 ／滑稽物 41 ／遍歴物 44 ／怪異物 46 ／教訓物 48 ／その他 49

3　貞門・談林の俳諧……51
I　貞門俳諧……51
近世俳諧史の曙 51 ／『犬子集』をめぐる二つの世代 53 ／太平の世の俳諧―その二側面 56 ／活発化する各地俳壇 57 ／多発する俳書、多様化する俳風 60 ／貞門末期、保守と革新 62

II 談林俳諧……62
宗因とその俳諧—守武流の継承 62／談林派の成立と宗因 64／京都俳壇、論争 66／宗因の死、談林派の終焉 68
4 歌舞伎と浄瑠璃……70
I 歌舞伎……70
歌舞伎の成立 70／初期の歌舞伎 72／野郎歌舞伎 75／元禄歌舞伎 77／狂言の類型 78／技芸の充実 80
II 浄瑠璃……83
人形浄瑠璃の成立 83／初期の人形浄瑠璃 85／金平浄瑠璃の流行 87／上方諸流の展開 89
付歌謡……92
三味線の使用 92／遊里の流行歌 93／劇場音楽の流れ 93／民謡・俗曲等 94
第二章 浮世草子
1 西鶴……96
I 俳諧師西鶴……96
西鶴の出生 96／俳諧の世界 97／『生玉万句』の刊行 99／妻の死と『独吟一日千句』101／矢数俳諧の創始 103／『大矢数』の西鶴 104／矢数俳諧の散文化 105
II『一代男』以後……106

目　　次

『好色一代男』の刊行 106／浮世草子の成立 108／『諸艶大鑑』の意図 111／『西鶴諸国ばなし』執筆前後 111／『好色五人女』と『好色一代女』113／西鶴の転換 115／広い世界への照射 116／『永代蔵』成立前後 117／病中の西鶴 118／最後の到達点とその死 120

2 八文字屋本……122

西鶴亜流の好色物 122／西沢一風 123／江島其磧の登場 124／元禄末・宝永期の他作者 126／其磧と八文字屋の抗争 127／正徳・享保期㈠―時代物の試み 129／正徳・享保期㈡―気質物の成立 128／正徳・享保期㈢―時代物全盛 130／多田南嶺 133／八文字屋本の末路 134／浮世草子衰滅への道 134

第三章 芭蕉とその周辺

1 俳諧革新の気運……138

俳諧史の曲がり角 138／貞享風と元禄風 140／俳壇の動向 142

2 松尾芭蕉……146

Ⅰ 伊賀・宗房時代……146

生没年月日 146／肉親と係累 147／蟬吟とその没後 150／『貝おほひ』と江戸移住 152

Ⅱ 江戸・桃青時代……154

宗因風の洗礼 154／宗匠立机 156

Ⅲ 漂泊・芭蕉時代……159

第一次芭蕉庵 159／第一次行脚 162／第二次芭蕉庵 164／第二次行脚 165／蕉風の確立 168／第三次芭蕉庵 170／第三次行脚 173

3 芭蕉没後の俳壇……175

元禄末俳壇の実態 175／都市新風と点取 176／都市俳諧の展開 177／蕉風継承と田舎蕉門 179／雑俳の独立 180／享保復古運動の性格 182

第四章 浄瑠璃の隆盛と凋落

1 浄瑠璃の大成と近松門左衛門……186

I 延宝・天和期の浄瑠璃と近松の登場……186

近松青年時代の浄瑠璃界 186／加賀掾と近松 188／近世悲劇の胎動と立場の悲劇 189／近世思想による中世説話の捉え直し 191

II 元禄期の近松浄瑠璃……194

加賀掾から義太夫へ 194／古浄瑠璃と新浄瑠璃 195／義太夫・近松による語り物の戯曲化 197／元禄期における多様性の追求 198／世話浄瑠璃の形成 200／浄瑠璃作者への転進 201

III 時代浄瑠璃の充実……203

時代浄瑠璃の整備 203／時代物における悲劇の思想 206／晩年の時代物悲劇の一特色 209／浄瑠璃史の屈曲と晩年の近松 210／時代物の多面的性格 212

IV 世話浄瑠璃の完成……213

世話浄瑠璃における方法の深化 213／世話浄瑠璃の到達点 215／世話浄瑠璃の終焉 216

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目　次

2 紀海音・竹田出雲・並木宗輔……218
紀海音 218／海音の作風の展開 219／操り芝居の全盛 221／竹豊両座の作者たち 223／初代竹田出雲 226／並木宗輔と二代竹田出雲 229

3 凋落期……231
古典化への道 231／近松半二 233／終末期の作者たち 235

第五章 儒学と国学

1 儒学（中国古典の研究）……240
伊藤仁斎 240／古義堂の開設 242／四書の批判 243／古義学の方法 244／伊藤東涯 245／荻生徂徠 247／古文辞学の方法 248／歴史的な認識 250／晩年の徂徠と門下 251／富永仲基 252／『出定後語』 254／後期の儒学 255

2 国学（日本古典の研究）……258
契沖 258／新井白石 261／賀茂真淵 263／本居宣長 266／『古事記伝』 268／平田篤胤 271／伴信友と狩谷棭斎 273

第六章 漢詩文の世界

1 漢詩文……278
I 近世漢詩文の黎明……278

目　　次

朱子学者の活動 278 ／林家一門の詩文 280 ／丈山と元政 282

Ⅱ 元禄の詩壇 …… 284

啓蒙の潮流 284 ／伊藤仁斎の詩論 286 ／詩文独立の機運 289

Ⅲ 文人の登場 …… 292

徂徠学の役割 292 ／古文辞派の活動 294 ／詩文の解放 297 ／南海・玉山・蛻巌 298

Ⅳ 漢詩文の隆盛 …… 300

擬古主義の否定 300 ／江湖社の活動 302 ／詩壇繚乱 304

2 狂詩・狂文 …… 305

狂詩・狂文ジャンルの成立 305 ／狂詩・狂文の方法 306 ／江戸時代初期の狂詩・狂文 308 ／狂詩・狂文の文学史的背景 310 ／東の南畝・西の銅脈 311 ／天明狂詩界の李白と杜甫 313 ／寛政期以降の狂詩 315 ／明治の狂詩復興 316

第七章 秋成と蕪村

1 上方読本前史 …… 320

白話小説の流行 320 ／庭鐘の活躍 322 ／綾足と椿園 324

2 上田秋成 …… 327

Ⅰ 秋成の生涯 …… 327

秋成の生い立ち 327 ／文人秋成の形成 329

Ⅱ 『雨月物語』 …… 332

『雨月物語』の典拠 332／執着の文学『雨月物語』 335
Ⅲ『春雨物語』……337
『春雨物語』の諸本と特色 337／歴史物語系『春雨物語』 338／本格的物語系『春雨物語』 340
3 天明俳壇と蕪村……342
蕉風復興の胎動 342／復興運動の展開 343／中興俳諧の達成 347
二つの蕉風 349／蕪村の立場 351／離俗論 352／蕪村の生涯 354
蕪村の文人性 355
4 幕末の俳壇まで……357
俳諧の大衆化 357／化政期の俳壇 359／一茶の人と作品 360／天保期の三大家 363／月並俳諧の流行 364

第八章　江戸の小説

1 洒落本……368
洒落本の輪郭 363／初期の洒落本 372／中期の洒落本 375／後期の洒落本 377
2 読本……378
読本の呼称と安永・天明期の読本 378／『高尾船字文』と『忠臣水滸伝』 380／山東京伝の読本 381／曲亭馬琴 384／文化年間の馬琴読本 385／『南総里見八犬伝』 389／曲亭馬琴の小説理論 392／十返舎一九・六樹

園・柳亭種彦の読本 394／幕末期の読本 395
3 滑稽本……396
談義本と談義 396／風来山人の戯作 398／一九の出府 401／三馬の活動 404
4 人情本……408
連作洒落本と『江戸紫』 408／文政期の為永春水 410／天保期の人情本 411／天保の改革と春水 414／人情本の世界 414／幕末の人情本 416

第九章 草双紙の流れ
1 赤本・黒本・青本……420
語義と区分 420／赤本 421／黒本・青本 422
2 黄表紙……426
語義と区分 426／恋川春町と朋誠堂喜三二 426／山東京伝 429／全交・喜三二・春町の三作品 432／黄表紙後期の京伝と馬琴 432／『敵討義女英』と十返舎一九・式亭三馬 435
3 合巻……437
様式と区分 437／読切合巻期 438／長篇合巻前期—柳亭種彦 442
長篇合巻後期 447

目　次

第十章 狂歌と雑俳

1 狂歌……454

狂歌の源流 454／知識人の余技—安土桃山時代の狂歌 454／貞徳とその門流 456／行風と信海 460／貞柳とその門流 462／天明以前の江戸狂歌 465／天明狂歌の誕生 466／天明狂歌のゆくえ 469／真顔と飯盛 473／地方の狂歌 476

2 雑俳……477

享保の前句付中興 477／宝暦新風と折句新式 480／初代川柳と万句合興行 481／『柳多留』刊行 485／俳諧高点付句集と『柳多留』 486／川柳評の展開と代々の川柳 488／化政以後の大阪雑俳 491／地方の雑俳 494

第十一章 歌舞伎の興隆

1 歌舞伎の発達……498

元禄以後の上方歌舞伎 498／人形浄瑠璃との交流 501／並木正三の登場 503／正三の作品と舞台機構の改良 505／江戸劇界の動き 507／天明歌舞伎と桜田治助 510／五瓶の江戸下りと寛政歌舞伎 513

2 鶴屋南北……516

『天竺徳兵衛韓噺』の成功 516／鶴屋南北の生涯 519／南北の作風と

「きぜわ」524
3 河竹黙阿弥……530
南北以後の歌舞伎 530／黙阿弥と小団次 532／黙阿弥の生涯と作品 534／黙阿弥の作風 538

第十二章 幕末の歌壇
1 結社と類題集……544
『類題草野集』の刊行 544／和歌人口の増加 545／師匠と結社 546／印刷の普及と和歌集 547／書肆と家集の上梓 548／類題和歌集の出現 551／『類題若菜集』と京都歌壇 552／『類題玉石集』553／類題集と縁のない歌人 554
2 真淵とその門流……555
真淵 555／加藤美樹（宇万伎）557／魚彦 557／宣長 557／鈴屋の一派 558／江戸派の歌人 559／春海と千蔭 560／浜臣と定信 561
3 王城の人々……562
蘆庵 562／景樹 564／景樹の門人 565／秋成 565
4 地方の歌人たち……566
中央に名の出ぬ歌人 566／発掘者 567／良寛 568／元義 568／曙覧 568／言道 569

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com